

野沢孝雄の受難

ロケットおっぱいと
お尻ペンペン

※体験版

目次

第一章：合唱コンクールの練習会

第一章：合唱コンクールの練習会

音楽室の窓は西向きで、午後三時半を過ぎるとオレンジ色の陽射しが斜めに差し込み、ピアノの黒い表面を艶やかに照らしていた。C 組の生徒たちは、いつものように男女に分かれて整列している。

女子は右側、男子は左側。音楽室にはグランドピアノがあり、その横に平井千香子先生が立っていた。

白い半袖ブラウスに紺のタイトスカート。ブラウ

スは薄手の綿素材で、胸のふくらみを包み込むように張り、ボタンの間からほのかに肌が透けて見えるほどだ。

平井先生の胸はロケットのように突き出ている、腕を動かすたびにゆったりと揺れる。男子生徒たちの視線が、まるで磁石に吸い寄せられるようにそこへ集中していた。

(中略)

「お前、また平井先生のおっぱいガン見してただろ。」

「うるせえな。見るだけならタダだろ。」

「バレてんぞ。目がハートマークになってる。」

「黙れよ。いいから歌え歌え。」

孝雄は小声で吐き捨てながら、視線を先生に戻す。
ブラウスが汗ばんで少し透けている。ブラのレース

がほのかに見えて、喉が鳴った。

合唱が盛り上がった瞬間だった。ソプラノとアル
トがハーモニーを重ね、ピアノが華やかに響く。野
沢はそっと後ろのドアへ向かって歩き出す。

誰も気づかない。気づいたとしても、トイレに行
くふりで済ませられる。廊下に出て、すぐに小走り。
靴音を殺しながら教室へ戻る。自分の机を開けると、
案の定スマホがそこにあった。

「マジで忘れてた……危ねえ危ねえ。」

ポケットに突っ込んで、すぐに音楽室へ戻る。何事もなかったように最後列に滑り込む。

「おい野沢、どこ行ってたんだ？」

隣の男子が小声で聞いてきた。

「トイレだよ、うるせえな。」

「嘘つけ。顔色変わってねえし。」

「ごちゃごちゃうるせえよ。黙って歌え。お前も
怒られんぞ。」

しかし、平井先生はピアノを弾き続けながら、すべてを見ていた。指は鍵盤を滑らかに動かしながら、視線だけが孝雄を捉えている。優しい笑顔の奥に、静かな怒りが灯っていた。

(中略)

「おっぱい先生、今日のブラウスやばくね？ ポ
タン飛びそう。」

「ロケットおっぱい、マジで最強だわ。揺れ方
がエロすぎ。」

「野沢、お前いつもガン見してるよな。ズリネ
タにしてんの？」

「当たり前だろ。巨乳平井の着替え動画持って
るやつ、神だよな。」

孝雄はニヤリと笑うだけだった。実は自分こそが
その“神”の一人だということは、誰にも言っていない。
い。

練習が再開される。

「はい、みんな。次は新しいパートから。気合
い入れていきましょう。」

先生が立ち上がると、胸が大きく揺れた。男子
生徒たちの視線が一斉に集中する。孝雄はまたぼん

やりと見つめながら、スマホの存在を確かめるようにポケットに手を入れた。これで安心だ、と胸を撫で下ろす。チャイムが鳴る。

「はい、今日はここまで。お疲れ様でした。明日の練習もこの調子でお願いしますね。」

生徒たちが片付けを始める中、平井先生は静かに言った。

「野沢君、放課後、音楽準備室に来なさい。大

事な話があるから。」

孝雄はドキッとした。心臓が跳ねる。

「わかりました、平井先生……。」

声が少し裏返った。過去の記憶が蘇る。AV を学校に持ってきて見つかり、お尻ペンペンされたこと。あの時の先生の膝の感触と、優しい声で言われた「悪い子っ！」が、脳裏に焼き付いている。教室を出ながら、孝雄はスマホを握りしめた。

「まさか、バレてねえよな……。」

でも、平井先生の目は、すべてを見通していた。

※転載・複製・二次利用厳禁